

2014（平成26）年度

科学研究助成事業（科研費）研究成果発表会

日時：2014（平成26）年10月22日（水）15：30～17：30

会場：京都ノートルダム女子大学 ユニソン会館 大会議室

プログラム

発表1（15：30～16：00）

ジョイス文学とサイレント映画 —フィルム・アーカイブ研究を中心に

須川 いずみ（人間文化学部 教授）

発表2（16：00～16：30）

学習意欲を高めるアラビア語教育—コミュニカティブ・グラマーの提唱—

鷺見 朗子（人間文化学部 教授）

発表3（16：30～17：00）

「都市の過疎地」における高齢者の日常生活行動の実態と住環境のあり方

竹原 広実（生活福祉文化学部 教授）

発表4（17：00～17：30）

知識創造型ユビキタスな学びによる教員養成の基礎研究

神月 紀輔（心理学部 教授）

主催 京都ノートルダム女子大学 研究・情報推進課

連絡先 TEL：075-706-3789

E-mail：kikaku@notredame.ac.jp

2014(平成26)年度 科研費研究成果発表会

会場：京都ノートルダム女子大学 ユニソン会館 3階 大会議室

須川 いずみ (人間文化学部 教授)

科学研究費助成事業 基盤研究(C) 採択 (研究期間 平成23年度—平成25年度)

20世紀最大の作家の一人であるジェイムズ・ジョイス(1882年—1941年)は彼の代表作である『ユリシーズ』の難解さによって知られている。彼は小説を書きながら小説の約束事を悉く覆し小説自体を解体するようなメタ・フィクションを提示する。ほとんどの研究者は変化自在の文体に注視し、『ユリシーズ』の中にホメロスはもちろんのことシェイクスピアを筆頭に英文学のほとんどの小説家の文体のパステリーシュを発見した。

長い間ジョイス研究者は高邁な字面に囚われて映画との関係に興味を示さなかった。しかし、ジョイスが生きた時代に映画が登場し、彼がそれに注目しないわけがない。事実、ジョイスは映画と親密な関係にあり、ジョイスと初期映画のアーカイブ調査が本発表のテーマである。



鷺見 朗子 (人間文化学部 教授)

科学研究費助成事業 基盤研究(C) 採択 (研究期間 平成22年度—平成25年度)

本研究の目的は、日本の大学におけるアラビア語学習者の動機づけ、態度、アラブ文化への興味、コミュニケーション能力に焦点をあてた学習者要因の解明によって、学習意欲を高めることであった。

学習者要因に関しては、特に学習者のアラブ文化への興味を高めることで、アラビア語習得の成果につなげることができると考えられる。さらに、学習者意欲をあげるためには、学習者が望んでいるコミュニケーションに関わる要素を組み込んだ授業を推進していくことが必要であることが導き出された。同時に、学習者のアラビア語運用能力を培うためには、教師が文法をコミュニケーションを重視したアプローチへ効果的に取り入れていくことが重要であろう。



竹原 広実 (生活福祉文化学部 教授)

科学研究費助成事業 基盤研究(C) 採択 (研究期間 平成23年度—平成25年度)

長い高齢期を地域で自立して健やかに暮らすことができることは、活力に満ちた地域社会の実現にもつながる。地域独自のニーズに応じ、様々な日常的な場面に対応できるきめ細かな取り組みが必要である。

当該研究は地域の独自性に着目し、「都市の過疎地」且つ「高齢化率30%以上」の地域を事例として取り上げ、高齢者の日常生活行動や住環境の実態と現状に対する評価を明らかにし、高齢者の自立を妨げない住環境のあり方について、地域独自の新たなニーズを探るとともに、外出実態を実験的に明らかにするものである。

住環境評価とニーズに関する調査では、買物及び交通バリアに対するニーズが高いことや、年齢層や家族形態によりニーズが異なることが、外出行動実験では、活動範囲はそれほど広がらないが頻繁に外出する者が多く、活動範囲が狭くとも近隣と交流があることで行動量(外出時間、移動距離)が増加し、それが身体活動量の増加にも貢献していることや、地元資源が地域交流の場として活用されている様子がみられた。



神月 紀輔 (心理学部 教授)

科学研究費助成事業 基盤研究(C) 採択 (研究期間 平成23年度—平成25年度)

本研究では、教員を目指す学生を対象に次の研究を行った。多くの学生はICTを利活用するイメージが少なく、学習者の主体的な学びの形態にも慣れていないことが分かった。デジタルカメラを用いた模擬授業の動画撮影とその動画を利用した振り返りやLMSを利用した意見交換による学びの深化を意図した学習方法により、他者の意見をWeb上で参照でき、写真・動画や自ら作成した指導案などのリソースを他者と共有することで自らの学習の進捗を実感できるようになった。

またデジタル教科書や電子黒板などを活用したICT活用を意図した授業づくりを行ったが、機器を使う程度にとどまった、しかし学習者の立場で学びを考える成果を得た。

